

日本ワイルド協会十周年に当って

井村 君江

(明星大学教授・協会会長)

世界で唯一の「日本ワイルド協会」が、着実に歩み続けて十年。十年一昔といわれるが、過ぎてみれば早いのが時の流れ、だが十年は一つのもの事が成熟し、次の段階へ移行する節目の年でもある。協会もいわば次の段階、熟年期に足を踏み入れたのであろうか。

Newsletter 第1号に付された「日本ワイルド協会八年の歩み」を通観する時、昭和50年12月6日、明治大学で開催された第一回「日本ワイルド協会設立記念 公開座談会（「ワイルドと現代）」と映画（「しあわせの王子）」の会」から、昨年60年12月7日、明星大学での外部講師を迎えた講演会まで、夏期セミナーと秋期講演・研究発表会の年二度の集りが、滞りなく今日迄続けられてきていることは喜ばしい。

十年前の春に、アイルランド文学・世紀末文学の権威である矢野峯人先生、ワイルド研究の大家本間久雄先生のお宅を荒井良雄先生と共にお訪ねし、ワイルド協会設立、組織・方針等について貴重な御助言を頂き、講師の方々をお願いして秋の設立の会に漕ぎつけたのであった。矢野先生は御高齢にもかかわらず設立の祝詞を賜わり、以後協会の背景での大きな支えとして毎回直筆の手紙をお寄せ下さっているが、本間先生は鬼籍に入られてしまった。手元の『柘榴の家』を開けると「原著はその着想の斬新と文辞の瑰麗と相俟ってワイルド作中第一の佳作なり」との流麗な文字があり、お訪ねしていた学生時代が懐しく、更に御指導賜わりたかったと惜しまれるが、設立時にお力添え頂けたことは幸いであった。翌51年本間資料コレクション展示会が学習院大学で行われ、ワイルドの頭髪を含む貴重な資料の数々に接することが出来たが、現在これ等は暗い金庫の中に眠っており、大勢の人の利用に供したいと生前言われていた本間先生は、天国でどうお思いであろうか。

英文学の大家で詩人であった西脇順三郎先生もこの世を去られたが、*The Soul of Man Under Socialism* と芭蕉の興味ぶかい話を、協会でお聞き出来て幸いであった。『オスカー・ワイルドの生涯』や『オスカー・ワイルド考』等優れたワイルド研究を著しておられる平井博先生は、最初期、顧問として協会に名を連ねて頂けていたが、お話を直接お聞きする機会が永遠に失われてしまったことは惜しまれる。また設立から協会の理事として、またシンポジウムの講師としても協会に御尽力下さっていたまだお若い三好弘博士が他界されたことも、協会の歴史の上で忘れられぬ出来事である。この他外部から招聘した講師には、

高橋康也、磯田光一、河村錠一郎、由良君美、吉田正俊、関川左木夫の諸先生方があり、特色あるワイルド論を拝聴できて感謝している。更に荒井先生の御好意により、*Theater and Film* (1979) の著者 Roger Manvell 博士中心の国際セミナーが持たれたことは画期的な事であり、続いて井村が詩人 Arturo Silva 氏、及びワイルドと同じモダレン出身の元オックスフォード大学教授 John Lawlor 等外人講師を招き、異った視点からのワイルド論を聴けたことは刺激的であった。

毎年7月の第1土曜日と日曜、七夕の逢瀬のように、全国より会員の方々が参加して下さる夏期セミナーは、大学セミナーハウスの年間行事予定に入っている程、定期的な催しとなっている。毎回テーマを定めシンポジウムを中心に、全員参加で考えるセミナーは稔り多いものがあるが、ワイルドの作品が広般なジャンルに亘っていることもあり、今後も様々なテーマが出て来そうである。童話・小説・批評・戯曲・詩そして書簡やワイルド自身の生涯、ワイルドを囲む人々、更にはフランスやイタリアそして日本に於ける影響や評価、又はその国の作家との関係—と研究テーマにはことを欠かぬようである。第一回セミナーを見ても、『サロメ』を（演劇・絵画・オペラ・映画）から総合的に多角的に扱っており、こうした究明方法がとれる対象であり、又協会がこうしたやり方でこれ迄やって来たということは、他の学会とはいささか趣を異にした Study as an Art、及び Creative Criticism の精神が会員間に横溢しているからであろう。

第一代会長西村孝次先生は『ワイルド全集』全五巻を完了され、更に健筆を振るわれ活躍されておられるが、第二代の小倉多加志先生は実践女子大学を今年御退官、ワイルドの博士論文刊行が待たれるが、第三代目は他分野の研究が忙しく東大修士論文「日本に於けるオスカー・ワイルド」改稿の筆が未だ置けぬ状態で、若い方々の叱咤を頂いている。十年間大過なく協会が存続しているのは会員の方々の協力の賜であり、本間先生直系の内山正平先生を始めとする顧問の先生方、役員の方々の助力のお蔭であるが、そうした協会の歩みが Newsletter として記録されることは嬉しく、編集に当たっている五味田幸夫・千葉剛両氏の労に感謝申しあげたい。

イギリス本国でのワイルド研究は、最近次々と出される新しい資料—— Alfred Douglas の Shaw や Harris 宛の手紙、妻 Constance の love letter 等——に依って再び新解釈を迫られている。また Montgomery Hyde の *The Annotated Oscar Wilde* (1982) や Lord Alfred Douglas (1985) Hart-Davis の *More Letters of Oscar Wilde*、が出され、Bentley の *The Importance of Being Constance* (1983) 等周囲の人々の詳細な伝記もまとめられ、側光を当ててワイルドの見直しがなされようとしている。The Importance of Studying Oscar の現今、協会の方々の今後益々の研究と、会の発展を切に祈る次第である。

(昭和60年12月7日に話した同題の講演の記録をまとめたものである)